バラやイカ 04

neji&co.（ねじあんどこー）
ダンサー・振付家、捩子ぴじんが主宰するカンパニー。
２０２０年より京都を拠点に活動する。

「バラやイカ」
バラは香りと棘がありまして
イカはつるつるとしてまして
ばらばらしてたり
つるつる泳いだり
そうしたものがここに並んでいるんで

編集・発行 neji&co.
MAIL nejiandco.kyoto@gmail.com
WEB nejiandco.com
2022 年 1 月 26 日発行

失認の経験　私のコロナ罹患日記

島貫泰介

われわれはものに接したとき、それが他者との関係においてどうあるかということを、直感的に見るのである。Pに欠けていたのは、この「見る」能力、他者とのかかわりを把握する能力だった。

オリバー・サックス『妻を帽子とまちがえた男』（早川書房）

２０２０年12月1日に新型コロナウイルス陽性の診断を受けた私は、同月15日まで入院し、その後約半月にわたって特異な後遺症に苛まれた。一般的に広く知られるコロナの症状はまず味覚や嗅覚の欠落から始まるそうだが、私の場合、発症から入院中にはそういった症状はなく、むしろ退院してから味覚の欠落がやって来た。

水っぽくて味のバリエーションに欠ける入院食に飽き飽きしていた私は「退院したら絶対に揚げ物を食べる。サクサクとプリプリが同居するエビフライなんて最高」と、退院から二日後に京都市内でも有名な洋食屋に勇んで出かけた。味覚の異変を感じたのはこのときだった。タルタルソースをたっぷりつけたエビフライを何度口に運んでも、ザクザクとした食感は感じるのに味はモヤっとしてまるでわからない。濃い味付けでないと味がわからず、つけあわせの福神漬けばかり、予備のポット一杯分ペロリとたいらげて店を出た（異常な客だったろうと思う）。ゆっくりと快復しつつも、正月あたりまでこの症状は続いた。

さらに強烈だったのが失認の感覚である。失認症とは「見ているもの、聞いているもの、触っているものが何かわからなくなる障害」【*1】だそうで、味覚を失った私はすでに失認状態であったのだが、平衡感覚の欠如、テキストを読んでも頭で理解できない失読症的な感覚、思考力の低下がそれと併走し、総合的な五感の失認としてやって来たのである。この時期に記録のために書いた日記を引用する。

失調した感覚間の結びつきが断たれると、どのようなことが起きるのか。
思うにそれは、すべてが均質に見える、感じられることではないかと思っている。
例えば今日ラーメン屋に行く道すがら、四速のゆっくりとしたスピードで自転車をこいでいると、過ぎ行く風景もとても緩慢になる。
そして光や影のコントラストもまた、ほとんどないように感じてくる。
見た目や、そこから得られる「理解」としてはそこにコントラストが存在するのはわかる。
でも、その区切りを身体の経験として、あるいは時間の経過を伴う経験として理解できないのだ。
これを、写真を撮る、という行為に当てはめてみると、それは「フレーミングがない」「構図がない」ということになる気がする。
思い出すのはもちろん、記憶を失って以降の中平卓馬の写真だ。

事故で転落、頭を強打して、快復して以降の中平の写真はといえば、同じ場所を何度も撮る、毎回ほぼ同じ角度に構図が斜傾する特徴がある。
これを、記憶喪失による単なる反復として見るか、そこからどのように思考を発展させるかは各々の批評家の判断に委ねられるが、私個人はそこに「構図」という概念の喪失を見る思いがする。
またポジフィルムの極端なコントラストの強さも、むしろコントラストの喪失として理解できるように思うのだ。
つまり中平は、撮影ごとの「構図」にも「コントラスト」にもこだわっておらず、ゆえに一貫したフラットさを獲得したのではないか？？
そう考えると、今の、味覚がわからず、五感が統合されない自分にも「フレーム」がない。そしてフレーミングを決定する「フォーカス」の概念・意思も存在しないことになるのではないか？

２０２０年12月21日（月）

この前日には、退院後最初の観劇として、捩子さんも出演したmimaculの『夢の中へとその周辺』（Lumen gallery）を観に行き、日記帳に「垣尾さんよかった。小鳥みたいだった。」という不可解な感想を書き残している。垣尾さんは、同じく出演者の垣尾優さんのことだ。ちなみに、公演後に捩子さんとお茶をしたときの茫洋とした私の印象から捩子さんはこのテキスト執筆を依頼したそうだが、自分がどんな様子だったかよく覚えていない。「城崎温泉でカレー屋兼ブックショップを開店しようぜ」なんて与太話をしていたかもしれないが、自動筆記の機械が発するような、「私」の内実を持たない「器」のような私であっただろう。

さらに日記を読み進めると、12月26日には知人から不要になった椅子をもらうために大阪まで遠出している。外界の情報の多さに参ってしまって、行き帰りの阪急線では他の乗客の会話すら何もかも過敏に感じられて「狂いそう」と書かれていた。

問題のエビフライ

　わずかな外出以外は、ほとんど痴呆症になったかのように茫漠とした気持ちで一昼夜を過ごす日々だったが、そんな状況であったにもかかわらず、12月後半はリモートで五本ものインタビュー取材をしていて我ながら驚く。以下は12月22日の取材後に書いたメモ。

今までのインタビューだと、話を聞きながら別のこと、段取りとかをずっと考えていたけれど、今はおそろしくクリア。Yさんの話を、ノイズほとんどなく聞いて、それへの応答・質問もわりと明快に発話できる。
邪念（ノイズ）がない。すごく頭の中が静か。つかれない。「なぎ」の海だけど、理解はすいすいできる状態。
まさに器。
これを一つ【の原稿】に組み立てていくことは、どこかパラノイア的な作業なので、この凪の状態が【それに】適応できるかは不明。
でも面白い。

２０２０年12月22日（火）
※【】内は今回の執筆時に加えた。

後遺症の症状は年が明けると次第に快復し、元の自分へと回帰していくのだが、この失認の経験は苦しいばかりでなく、興味深いものでもあった。
　２０１９年夏から２０年末にかけての私は、かつてないほどの強迫的な精神状態にあった。「あいちトリエンナーレ２０１９」（２０１９年８月１日〜10月14日）での検閲問題に始まり、半ばなりゆきで文化庁による同芸術祭への助成金カット問題に抗議するデモを永田町の文化庁前で敢行（２０１９年９月26日と30日の二回）して以降、極度に政治的でさまざまな消耗を伴うアイデンティティを獲得した／してしまったのだ。トリエンナーレ終了後も、三浦基（地点）による劇団内パワーハラスメント／ロームシアター京都の館長就任問題の水面下での再燃などが重なり、私の素人活動家のような生活は続いた。その張り詰めた精神状態が、コロナ罹患とその後の後遺症によってシャボン玉のように突然弾け飛んで、いっときそのすべてが消え去った。
　それまでの私や私をとりまく状況を否定する気はまったくないが、突如訪れたこの不意打ちの転回、失認の感覚を忘れるべきではないと思っている。

自他の境界がおそろしく希薄になっていて外出が危ない。
歩いてる自分、自転車をこいでいる自分、歩道、車道、他の歩行者、車、そういったものとの境界があいまいで、
恐怖心もないし、カンも鈍っている。
人類補完計画みたい

洗たく物を干したり、料理をつくっていて
それはこれまでに、コロナになる前までに会得した経験の「型」をなぞっているだけ。
でも、それで生活の時間を過ごすことができて、
心も平穏なら何の問題もないのでは？？

ボケ老人はただ「ぼーっ」としているのではない。
それはまわりが思うように悲しいことではない。あわれでもない。
ぼーっとすることに満たされている。
ぼーっとした世界に満たされている。

むしろあらゆる経験、新しい知識に
圧倒的に、あっけらかんと開かれていて自由を感じる

２０２０年12月20日（日）

コロナ前のインタビュー構成や原稿執筆は、いわば自分と自分α、自分β……の自分内会話であったのかもしれない。
一つの作られた物語のために、自分の中で複数の自分の声を響き交わすようなもの
　　↑オブセッション、リフレクション

コロナ前とコロナ後でいちばん違うなあ、と思うのは、自分の頭の中の、あるいは実空間で聞く耳の聴取体験のことでもあるのだが……頭の中の「無音」あるいは「無響」の状態であった。
仮に脳という物体、そのかたちで聞いたこと、目にしたこと、考えたことをキャッチして理解するのだとしたら、
脳の外殻には、まさに殻のようなプラスチックのケースがあって、その上を意味がつるつると滑っていくような感覚があった。
それを脳の内側、底、奥の方から眺めていて、そこを滑走する言葉は視覚として認識できても、その意味は理解という着床には到らない。そんな感じ。

２０２０年12月23日（水）

当時のメモをまとめて、それを事後的に概括しみても、理性のつまらなさが際立つだけなので必要以上に踏み込まないが、かろうじて以下のようには言える気がする。

自我を確定しようとする／できると思うこと自体がパラノイア的で、危うい。コロナでそれが弾け、後遺症として溶解していくスキゾフレニックな過程は、その硬直をほぐすものとしてある。

こういった感覚を捩子さんに話したとき「それ、めっちゃいいダンス踊ってる時」と言われ、私たちの共通の友人である美術家の三枝（愛）さんからは「絵を描いてた頃のいちばんヤバい状態がそれ」と指摘された。これは素直に嬉しい。ダンスやペインティング、作品が生成する秘密に触れた気がした。

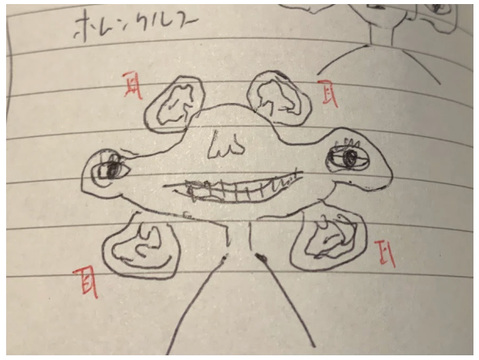
ヨーロッパではコロナ陽性者の八割近くが「思考力の低下」「記憶障害」を訴えているという。そのなかにはより深刻な後遺症に苦しむ人も少なからずいて、軽々しく「貴重な経験」と言って済ませるわけにはいかないが、１億６０００万人以上【*2】がコロナを経験し、その半分以上が私が感じたのと同じような失認の経験を共有しているならば、人類の世界への認知は既に大きく変わっているかもしれない。その想像から導かれる未来は、多少不謹慎ではあっても、私を興奮させる。

もしも「ポストコロナ」と呼ぶに相応しい時代区分がありえるとしたら、『妻を帽子とまちがえた男』のPを肯定しうる時代なのかもしれない。

*1　「医療法人財団 利定会 大久野病院 西多摩高次脳機能障害支援センター」ホームページより引用
http://www.oounohp.com/kouzinou/k-ill06.html
（最終アクセス　２０２１年５月23日）

*2　Wikipedia「Template:COVID-19 pandemic data」を参照
https://en.wikipedia.org/wiki/Template:COVID-19_pandemic_data
（２０２１年５月23日時点）

失認状態で撮った写真



失認状態の自画像　耳は異常に鋭敏になり、目は大皿のように漠然と状況を見るようになる

バラやイカ０４　Cue

nejiとco.カンパニーマガジン「バラやイカ」。第四号は、２０２１年６月にTHEATRE E9 KYOTOで上演された作品『Cue』に関連するテキストを掲載します。『Cue』は、Stay Home、緊急事態措置等の待機継続下で、終わりの見えない、持続する現在から出るために、どのようなダンスが可能なのか、また、現在の「外」とは何か、という問いと共に制作されました。本号に寄せて、ライター／編集者の島貫泰介氏には、コロナ感染後の身体について、ジャワ舞踊家の佐久間新氏には、コロナ下でダンスを継続するための工夫について、ダンス批評の竹田真理氏には劇評を、そして、山羊昇氏にはフィクションを執筆していただきました。『Cue』はリクリエーションを経て、２０２２年４月にTHEATRE E9 KYOTOで再演されます。本号と合わせてそちらもご覧ください。

ほんじつは、きんきゅうじたいせんげんか、がいしゅつじしゅくがさけばれるなか、かんせんのりすくをかえりみず、また、かんせんかくだいのりすくをもかえりみず、ねじあんどこー、きゅーにごらいじょういただきありがとうございます。じょうえんまえにいくつかおねがいがございます。けいたいでんわやおとのでるでんしきをおもちのかたはでんげんをおきりくださいますようおねがいいたします。きょかのないさつえいろくおんはかたくおことわりしております。また、かんせんしょうたいさくのため、じょうえんちゅうはますくのちゃくようをおねがいいたします。ほんこうえんはしんがたころなういるすかんせんしょうたいさくのため、きゃくせきいちのはあくにごきょうりょくをいただいております。おわたししたざせきひょうにおなまえをごきにゅうください。ごきにゅういただいたざせきひょうはしゅうえんごにかいしゅういたしますので、かかりのものにおわたしください。ほんじつ、じょうえんちゅうにきろくさつえいがはいります。さつえいじにきゃくせきがうつりこむかのうせいがありますので、うつりこみをきにされるかたは、しゅうえんご、うけつけのすたっふにおつたえください。ほんばんちゅうはひじょうとうをしょうとういたします。ひじょうじのさいはかかりのものがあんないしますのでおせきにておまちください。でも、ほんとうにあぶないとおもったときは、じぶんではんだんしてにげてください。じょうえんじかんはななじゅっぷんをよていしております。とちゅうきゅうけいはございません。まもなくかいえんいたします。

―開演前アナウンスより

St. Simons Is.

Cue　コロナ下のカエルとの試み - ねじぴじんの声を聞いて

佐久間新

２０２１年６月 THEATRE E9 KYOTO
だらりとからだがたわみひろがり地をとらえ、野太い響きが喉から撒き散らされる。
震えが層になりホールを破裂させようかとすると、沈黙が逆走してきた。

２０２０年６月豊能町牧の棚田
たんぼの畔で開いたラップトップの画面に、
古川友紀さんが見つけた別の場所にいるカエルが映し出される。
いつものようにコミュニケーションしようと「コココッ」と声をかける。

ああ、だめだ。何かが違う。届かない。つながらない。

どちらを向けばいいのか。声を出す方向が分からないような。
平べったい液晶モニター裏にはカエルがいないような。無力感。
きっとカエル君は見てないだろうなあ・・・という不安感。
その時まで、zoom 参加者とやりとりしていたのに。

去年6月、『なつのカエルケチャまつり*1』というzoomを使ったオールナイトイベントをした時の出来事。大阪北部の棚田をベースキャンプに、世界各地の参加者とカエルをオンラインでつないだ。やりたかったことは大体こんな感じ。

・時間によって変化する棚田のカエルの声を聞く
・参加者の近くにいる世界各地のカエルの声を、棚田のカエルに聞かせる
・みんなでカエルとの交信を試みる
・オンラインで集団即興や新しいケチャを試みる
・夜明けのカエルの時間を味わう

グッと戻って今、こういったことは、オンラインでは伝わりにくいので、zoomが使われるようになり始めた時、どうやってダンスができるだろうかと懐疑的になった。しかし、『だんだんたんぼ・・・』を通して、芸能を開くことにも意識が向かっていた。さっき書いた舞踊のニュアンスはとても大切なんだけれど、ジャワ舞踊をできないのか。どうすればジャワ舞踊をみんなで踊れるのか。一体ジャワ舞踊の何が残るのだろうか。

迷いながらも、コロナ下でダンスを中断したくないので、ダンスする方法を模索した。その一つがzoom。全世界どこからでも、何人でも、スマホかPCがあればライブ中継できる装置。人は移動できなくなった代わりに、こんなものを手に入れた。情報量を制限することで成り立っているので、ニュアンスを求めることはできない。スマホやPCは画面の裏側が見える宙ぶらりんな感じ。液晶ののっぺり感。存在感の軽さ。皆が自分の顔を見続ける気持ち悪さ。自分の空間が晒される危険。モニター#カメラ。などなど違和感の塊だった。ダンスの大切なニュアンスは出しにくいのだけれども、ジャワ舞踊には、芸能には、何かできることがあるはずだと信じた。

カエルケチャの夜明けの時間、砂連尾さんのいる東京の空が先に明るくなった。真っ暗な部屋でモニターの光に照らされた朝まで残ったディープな参加者の顔顔。朝靄。夜露。雨。カエル。鳥。ことば。ほんまなほさんのうた。野村誠さんのケンハモ。一晩かかって、世界中をカエルが駆け巡って、たどり着くような、ジャワのオールナイトワヤン（影絵芝居）が終わる夜明けの時間にも通ずる何かがうまれていた。

話が広がりすぎるかもしれないが、大学時代にガムランと出会った後、自分の体を変化させる出来事が次々と起こっている。

・阪神淡路の震災 ― 止まっていると思っていた地面が動くことに気付かされた。
当たり前の街が、映画で見た戦争のような風景に変わった。
・同時多発テロ ― 映像の衝撃、価値の転倒。
・東日本の震災と原発事故 ― 逃げることができない放射能の恐怖。
思いっきり深呼吸できない、道端に寝転べない絶望。
・新型コロナ ― 触れられない、交われない。世界同時で逃げ場所がない。
助けを求められない、助けられない。治療法が無い。いつ終わるか分からない。

２０００年の春、農家の倉庫に移り住んだ。何年か経って夜明けのカエルの声の素晴らしさに気付いた。知り合ったばかりの砂連尾理さんが聞きたいというので、何人かが泊まり込みでやって来た。雨だったので、傘やカッパにあたる雨音がうるさくてあまりうまく聞こえなかった。それから毎年『カエルオールナイトピクニック（KAP）*2』と名付けて十年以上続けている。日がのぼる直前、鳥が鳴き始めると、カエルの最高のアンサンブルと鳥のアンサンブルとが瞬時に入れ替わる。それを楽しむのが第一の目的だった、のだけれど、いつしかカエルと声でやりとりできることを発見し、それにも没頭している。

二年前、棚田のカエルをヒントにして、たんぼぼの家の障害があるメンバーやスタッフ、音楽家、ダンサーと共に『だんだんたんぼに夜明かしカエル*3』という舞台作品を発表した。非言語のコミュケーション、集団即興、からだの超密着、芸能を開くなどがテーマだった。

さて、次に何をするかと思っていたら、コロナの事態になった。ちょうど製作中だった帰山玲子さんの公演をどうするかで悩んだり、非常勤で行っている大学の授業がリモートになったり、たんぼぼの家で続けているダンスの時間でもzoomを使うようになっていったりした。そこで思いついたのがカエルケチャだった。日本各地、インドネシア、タイ、アメリカ、オーストラリア、ポーランドの人が参加してくれた。いろんな言語が飛び交い、多言語で話し続けた。分かりにくいイベントだったので、何がやりたいかを説明しなければならなかった。古川さんが発見したカエルがモニターに登場した時、その言語の世界・理屈にとらわれた脳の世界から、カエルの世界、音の世界へすっとジャンプできなかったのが、無力感を感じた一つの要因だろう。一方で、『だんだんたんぼ・・・』のメインキャストだったたんぼぼの家の山口広子さんは声を張り上げてマイペースでカエルとやりとりしていた。また、ジャワの音楽とダンスの超人スボウォさんは全身でカエルになりきってやりとりしていた。これには、救われた。

話があっちこっちへいって申し訳ないけれど、20年以上前のジャワ舞踊留学の話。ジャワ人と同じように、外国人だとばれないように、舞踊家たちに混じって踊るにはどうすればいいのかと格闘していた。

・気配、呼吸、緊張と弛緩、スピードの微妙な変化、動きの起点やベクトルなどのニュアンスがとても気になった。
・三年くらい経つうちに、徐々に舞踊家に、ジャワの街に紛れ込めるようになっていった。

ダンスを中断したくない、そんな時、難しい時だからこそ踊りたい。では、どんな工夫をすればいいのか。工夫することには慣れていく。バニュ・ミリ、水が流れるというジャワの言葉。ジャワ舞踊の真髄だと言われていることばを考え続ける。

二月ほど前、突然、ジャカルタで開かれるダンスフェスティバルに参加するように誘いがあった。障害がある人とダンスを制作して発表してほしいと。残念ながら現地に行くことはできなくなった。来年に向けてワークショップを開始し、映像を制作することになった。ジャカルタの参加者とのzoomセッションを前に、担当者が「みんな、即興はあまり得意じゃないかも・・・」などなど心配していた。セッション当日、鈴木潤さんと即興を始めてみたが、みんなじっとしている。zoomなので様子はよくは分からない。分からないけれど、たぶん大丈夫だと感じた。即興ダンスを続けていればいいだろうと感じた。何がそう感じさせたのだろうか。zoomの向こうの彼／彼女たちとつながっている感じがある。カエルの前で無力感を感じた時とは感覚が変わっている。

新しい装置に慣れ、使いこなせるようになると、手放してしまう感覚もある。これは絶対ある、悲しいけれど。スマホを手に入れて、ジャワの人たちが変わってしまったので分かる。失われそうになる感覚を必死につなぎとめつつ、オンラインの先にまで、体や感覚を伸ばしていくようなことはできないだろうかと探り中である。

*1なつのカエルケチャまつり
https://shinsakuma.jimdofree.com/work/ なつのカエルケチャまつり/

*2カエルオールナイトピクニック
「深夜の水田イベント　耳澄ましカエルと交流」上毛新聞 2021/7/9
https://www.jomo-news.co.jp/feature/shiten/308802

*3だんだんたんぼに夜明かしカエル
https://shinsakuma.jimdofree.com/work/ だんだんたんぼに夜明かしカエル/

neji&co.『Cue』劇評

発動する舞踏

竹田真理（ダンス批評）

Covid-19の感染拡大にともなう行動様式の変調を、neji&co.が旗揚げ後、第一回の公演で二つのプログラムに託して示したのは二〇二〇年11月のことだ。二作品とも知的で捻りのある手法が特徴的で、これが京都で本格的に始動した捩子ぴじんの批評のスタイルであるかと感じ入った。それから約半年後、カンパニーとして二度目となる今公演のタイトルは『Cue』。パンデミックの下、曖昧に制限を受け続ける異様な事態に喘いだ舞踊家の身体に、「発動せよ」と促す捩子の挑発とも読める。

『Cue』の舞台では開演前からパフォーマンスが行われている。ダンサーらが交わす言葉や身振りは子供の遊戯かカルトな儀式にも見え、音声読み上げソフトによる人を食ったようなアナウンス、加工されたギター音による奇妙なフレーズなどが、前作にも増して捻りや皮肉の色を濃くしている。ところがこの後、本編の舞台に現れたのは、意外にも、捻りも衒いもない舞踏の身体だった。この選択が、コロナ禍において芸術が――「不要不急」なものから生存に必要なものへと意味を変える過程で、逆説的に――失いつつある政治性への応答であることは、捩子自身が当日パンフレットに記した言葉から察することができた。舞踏が具現化する非合理の身体、既存の枠組みや制度を揺るがし転覆する力を湛えた身体を、芸術が社会に包摂されつつある今こそ呼び出そうとするのである。捩子を含めたカンパニーの三人は、各々がたっぷりと時間を費やし、ソロを踊る。三つのソロは形骸化した舞踏のパロディなどではなく、個々の必然から生じる生きた実践といえた。三人が触れ得ている舞踏的な価値はそれぞれ異なっており、また舞踏の訓練を積んでいない若いメンバー二人には技術やスタイルに依存することが不可能である中で、今ここの実践＝上演において身体のエッジに立たんとする舞踏の精神の本質に正面から迫ろうとしていた。

床に置かれた枯れ木の枝が暗い藪を思わせる舞台。陰りの中に佇む捩子は、手ボケ、震え、絞り出す声を自在に操り、全編にわたって技巧の冴えを見せる。マスクを外してニタリと笑う表情は不敵であり、呪いのように意識の底からこぼれ出る言葉は、よく聞くと現状への憤りを露わにしている。しかしそれらはたちまち分類不能の感情へ、さらに顔面の筋肉の動き、声の戯れへと還元される。傍らに控える共演者（持木永大）はダンサーを撮影したりポータブルの音響デバイスを操作したりと、歪にブレ続ける捩子の動き、多用される声に絡み、舞台にアイロニカルな色調を添える。自らを距離をもって見ているような捩子の踊りは、フィクションでしかない自我の底に降りていくのではなく、得体の知れない何者かをその身に招き入れる。エフェメラルな声、言葉、表情が他者のそれとして去来し、そこに政治性を滑り込ませる捩子のしたたかさ、巧みさ、強靭さ、企みの底知れなさに唸らされる。

畑中良太は技巧を持たない無防備な身体で藪に迷い込むように現れる。お約束の硬直や痙攣を見せ、荒ぶる身体にアニメ的な風味を加えた舞踏のクリシェかと思いきや、ある時点から明らかにボルテージが上がり、パフォーマンスは壮絶さを帯びる。突き上げる感情に内側から苛まれ打ち震える身体、異物を吐き出すように呻き、絶叫する様子は、情動の言語化を断たれた生き物の慟哭そのものだ。稽古の中で捩子が若きダンサーを焚きつけたに違いないが、いまや畑中自身が自らを存在の際（きわ）に追い詰め、外へ出ていこうと激しく欲している。ただし繰り返す絶叫に音楽が同調し始めると、空っぽの身体から発する乾いた声へと聞こえ方が変わり、漂白されたナンセンスな光景へと変貌する。

大谷悠のゆっくりとした足の運び、周囲を見回すでもない曖昧な佇まいは、日常のままのそれであると見えて、その実、精妙に制御されている。儚い手の動き、爪先立ちの揺らぎも非常にさりげないので、にわかにそうとは気付かないのだが、耳に届いた呼吸の音に、大谷の内部でひしめいている無数の力の存在を知り、驚嘆した。内なる負荷に静かに耐え、倒れや崩れの予兆を孕みながら、かろうじて立っている危機の身体。音楽が入ると習得してきた様々な技術が作動し始めるのか、フォルム志向のダンスの要素が加わり、より複層的に身体をひしめかせる。スキルに内実の伴ったダンサーである大谷が、舞踏のフィルターを通して未だ見ぬ自身の踊りと出会っていることに強く惹きつけられた。

さて、三つのソロに手応えを得た後に、真の衝撃が待っていたのが今回の公演である。余韻の残る舞台の中央に三人は向かい合って身を寄せ、トリオを形成し始めるが、あろうことか顔を近づけ、互いの鼻先を接触させるのである。ここに至るまでにもマスクを外す行為や飛沫を飛ばした叫びなど、コロナ禍における行動規範への挑戦をジャブのように繰り出してきた本作だが、この濃厚接触こそは最大の侵犯を意味した。感染へのリスクを負ったリアルで無謀な行為は、あらゆるタブーの侵犯がそうであるように、祝祭であると同時に死とエロスの影をまとっている。ここから、捩子がカンパニーという集団の形態をもって何を目論み、何処へ行こうとするのか、少しばかり掴めたように思う。命運を共にするといえばふた昔前の劇団のようだが、社会への批判意識を根底にもちつつ、濃密な関係性のなかに個々の生存を賭した表現を切り拓いていこうとする。エッジの先に危険で魅惑的な行程が待ち受けているように思われる。

日本で新型コロナウイルス感染症が拡大してからおよそ1年半になります。感染拡大と縮小、Go To と Stay Home、発令と解除の反復は、過去と未来を欠いた現在が持続し、11週目の2020年を迎えているのではないかと錯覚させるかのようです。劇場では公演の中止や延期を経て、感染症対策を施しながら様々な舞台作品が上演されています。検温、ディスタンス、消毒、マスクの着用、客席位置の記入提出などの感染症対策が、パンデミックにおいてもなお必要とされる文化芸術活動を継続するための苦肉の策なのか、ニューノーマルと呼ばれる新たな生活様式が一般化したものなのか、それとも別のやり方で、劇場にも舞台芸術にも新しい意味を生成する可能性があるのか、問いかけながら作品を制作しています。作品のタイトルになっている "Cue" は、きっかけ、手がかり、合図を意味する英語です。また、舞台作品でパフォーマーが登場する、退場する、音響や照明が変化するなど、公演中に起こる様々な出来事のきっかけを "キュー" と言います。現状を打破するために抗議の声を上げたり、慣れ親しんだ土地を離れて暮らすことを決めたり、生きることそのものを決断しなおしたりするように、未来の変化や、自身の変容を求めて影響力を行使する行為に人を駆り立てるきっかけがあれば、なす術なく、過酷な現実の中で正気を保ちながら、希望を失わずに待ち続けるきっかけもあるということを、強く思い知らされる1年でした。新作『Cue』は、きっかけを作ること、きっかけを待つこと、きっかけによって動くことを振付として扱います。様々な振付を体に作用させ、持続する現在の外に出ることを試みるダンスです。そして劇場で舞台作品を上演し、観客と体験を共有することを心から楽しむことが出来るその日まで、公演は先送りにします。その日が来ることを期待して待ちたいと思います。6月5日（土）、6日（日）の上演は非公開とし、今後 THEATRE E9 KYOTO を会場に、舞台作品とは異なる上演形態で作品『Cue』を発表します。

neji&co. 主宰　振付ぴじん

上演は非公開の予定でしたが、公開することにしました。劇場公演終了後も、年間を通じて様々な形で作品を発表します。劇場でお待ちしてます。

2021年5月22日　neji&co. 主宰　振付ぴじん

—公演に寄せて

neji&co. は、2020年1月に結成されたカンパニーです。同年11月に THEATRE E9 KYOTO で第1回公演 neji&co.『Sign』／梅田哲也『ドレスコード』を開催し、今回 neji&co.『Cue』は第11回公演ということで、まさに、コロナと共に活動を始めたカンパニーということになります。時間感覚の失調、反復、身体の不調、不安定な未来等、外に出ればダンスのネタには事欠かない状況で稽古をしてきましたが、ダンスを踊ることも、ダンスを見ることも、そして劇場に足を運ぶことも、どこかしら、何かに抵抗しているような気配を帯びてきたのを感じます。それは舞台芸術にかかわらず、音楽を聞いたり、映画を見たりすることもそうだし、日常生活の中で大切にしている極めてパーソナルな時間を過ごしている時も、正気を保つために必死に暇つぶしをしているだけのような切迫さに気づかされることがあります。自虐ではなく、ネガティブな言葉だからこそ言い表すことのできる価値を説明するのは本当に難しいのだけれど、言葉の政治的な効果はさておき、私たちの仕事を言い表すのに、不要不急という言葉は的を得ていました。今やその言葉の意味は持っていたねじれを無くし、不要不急だからこそ価値を持っていたはずの文化芸術が、必要とされる価値を持ちつつある世界を生きています。できればそのような世界は訪れて欲しくなかった、というのが正直なところです。それとも、そのような世界はもっとずっと前に訪れていて、コロナをきっかけにようやく気が付いたというのが本当のところかも知れません。いずれにせよ、文化芸術の支えを必要とする世界を生きる道のりは、過酷なものに違いないでしょう。

本公演 neji&co.『Cue』は、当初非公開での上演を予定していました。それは、マスク、検温、消毒やディスタンスを必要としない客席が、いつの日にか戻ってくると思っていたからです。その日が来るまで上演は先送りにし、劇場で公演を開催することも、観客として客席に座ることもしないと決めていました。でも、そのような日が戻ることはないかも知れないと、最近思います。そして、別の未来に待っているのは、残念なことばかりではないはずです。2021年、『Cue』は『Cues』として劇場、オンライン、市内各所、紙媒体等、様々な場所で形を変えながら上演されます。ひとまず今日のところは、私たちがマスクを外し、飛沫を飛ばしながら濃厚接触をする特権をお許しください。ご来場ありがとうございます。

neji&co. 主宰　振付ぴじん

—『Cue』当日パンフレットより

neji&co. Cue

構成・演出—振付ぴじん
振付・出演—大谷悠、振付ぴじん、畑中良太
出演—持木永大

舞台監督—脇田友（スピカ）
照明—中山奈美　魚森理恵
音響— mizutama
衣装—増田美佳
撮影—持木永大
記録写真—前谷開
宣伝写真—山羊昇

主催・企画製作— neji&co.
共催— THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）
協力—御厨亮　塩見結莉耶　川島玲子　迫上真弓　長峯巧弥　岸日和多
甲田実華　小寺春翔　吉岡ちひろ（劇団なかゆび）
Space bubu　HAPS
THEATRE E9 KYOTO 第2期アソシエイトアーティスト

2021年6月5日（土）19時 開演
2021年6月6日（日）11時30分 開演
THEATRE E9 KYOTO

ジリヤトカ04

島貫泰介（しまぬき・たいすけ）
美術ライター／編集者。1980年神奈川生まれ。京都と別府を拠点に『美術手帖』『CINRA.NET』などで執筆・編集・企画を行う。2020年夏にはコロナ禍以降の京都・関西のアート&カルチャーシーンを概観するウェブマガジン『ソーシャルディスタンスアートアガシンかもめくり』をスタートした。19年には振付ぴじん（ダンサー）、三枝愛（美術家）とリサーチのためのコレクティブを結成。21年よりチーム名を「再歩」に変え、展示、上演、エデュケーションなど、多様なかたちでのリサーチとアウトプットを継続している。

佐久間新（さくま・しん）
流れる水のように舞う舞踊家マン・スパルト氏に出会いシャワ舞踊を志す。伝統舞踊におけるからだのありようを探求する中から「コラボ・即興・コミュニケーション」に関わるプロジェクトを展開中。演出作品に『ぢんぢんぢんぼに夜明かしカエル』（2019）等。海外公演に "Patina" OzAsia Festival, Adelaide（2019）等。コロナ下のリモートダンス『カエルケチャ』（2020）を開催。

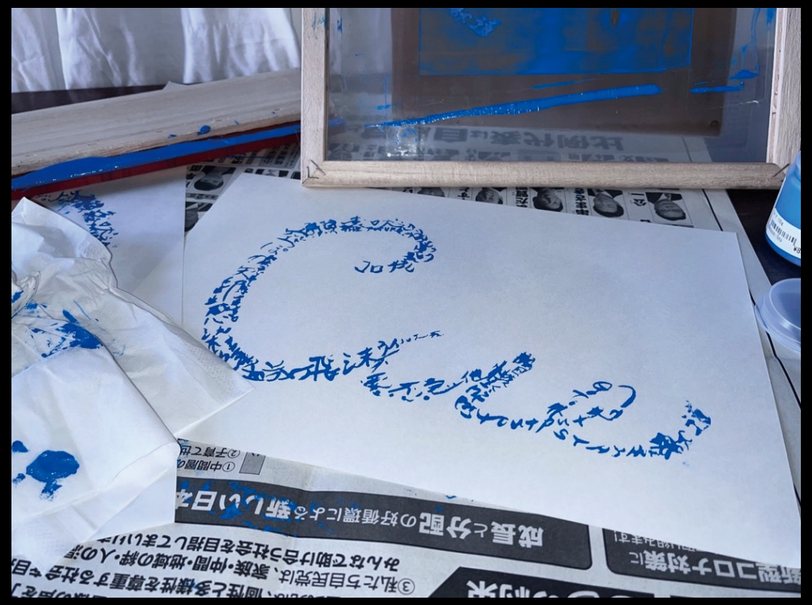
竹田真理（たけだ・まり）
ダンス批評。関西を拠点に活動。毎日新聞大阪本社版「シアターアーツ」、国際演劇評論家協会関西支部発行の劇評誌「ACT」、その他にダンス評を寄稿している。

振付ぴじん（ねじ・ぴじん）
ダンサー・振付家・neji&co. 主宰。2004年まで舞踏カンパニー・大駱駝艦に所属する。舞踏で培われた身体を元に、自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、ダンサーの体を物質的に扱った振付作品を発表する。2017年より京都在住。2011年、横浜ダンスコレクションEX審査員賞、フェスティバル／トーキョー公募プログラム F/T アワード受賞。2016年、Our Masters 十方実「異言／glossolalia」キュレーター。2021—23年度 THEATRE E9 KYOTO アソシエイトアーティスト。2022—24年度ヤマハ文化財団ヤマハ・フェロー。

neji&co.（ねじあんどぴー）
ダンサー・振付家、振付ぴじんが主宰するカンパニー。未来への展望を得るための振付として設立され、2020年より京都を拠点に活動する。

『Cue』舞台写真—前谷開
写真—島貫泰介（P2、3、5、7）、白石将生（P15、16）、振付ぴじん（P23上）、脇田友（P23下）

京都市「Arts Aid KYOTO」補助事業



neji&co.『Cue』サウンドトラック

ブラックボックス、空っぽの矢印、獣道、遠吠え。振付のコンセプトを劇場で録音した音声で構成した、作品『Cue』のためのサウンドトラック。

録音・編集・ミックス｜ mizutama

https://nejiandco.bandcamp.com/album/cue

neji&co.『Cues』

セゾン文化財団オンライン・リサーチ・レジデンシー 2021/22「Cue のための喪のリサーチ」の成果発表として上演された。2022 年 4 月に、『Cues』の発展形として、リクリエーションした『Cue』を THEATRE E9 KYOTO で上演する。

振付・出演｜捩子ぴじん　出演｜姫田麻衣　撮影｜大谷悠

https://vimeo.com/675697784

雨の日のこと

山羊昇

傘持ってなくてね、持っててもあたし傘さして漕げないから自転車、だからどのみち足止めくらっちゃったのよ。こういうときよね、なんだか試されてるって思うの。人間として、みたいな。大げさだってあんた笑うけど、そういうもんよ。こういうときなのよ。あたし少し待ったわ。そうよがむしゃらに動いたりしないの。自転車を置いたままにしてバスで行くわけないじゃない。また戻ってこなきゃいけないなんてそれこそ面倒でしょう。迎えの車が来たりね、タクシーを拾っていったりね、どんどん人がいなくなるのよ。あたしだいぶ待ってみたの。それで慎重に出発したのよ。だいぶ待ったんだから慎重よ。それなのになんなの。結局ずぶ濡れよ。ぽたぽたぽたぽた服って濡れると重いのね。そんなことより鞄の方が気がかりで紙って乾かしたって元には戻らないでしょう携帯とかそういうのだって濡れたらだめでしょう。せめてビニール袋でもあればよかったしコンビニに寄ったってよかったけどもういいわってなるのねもういいのよ。あんたは濡れなさそうね。さっさとタクシーを手配するか、いくらでもずっとぼうっと待っていられるんでしょうねやむの。そもそもそんな目に遭わなくてすむように雨雲レーダーもチェックしてるんでしょうね。知ってた。自転車は前に進むから当たりにいくのよ。顔は痛いくらいで口の中にも雨が入り込んできて道端に二回くらい唾吐いたわ。初めてよそんなことしたの。指先は冷たくて白くてふやけて、プールも海も久しく入ってないのに、あたしの体まだこんなふうになるんだって人の手みたいに見てたの。

あんたのお母さん家にいた人。昼過ぎから急に降り出したとき、下足箱に傘が届けられていた人。外が夜みたいに暗くなってそんな学校ってだけでみんなそわそわしだして雷が鳴ろうものならきゃーきゃーわーきゃーして、終わりの会は終わらなければいいし、廊下の開いてた窓から吹き込む雨で滑る床を走り回る男子は転べばいい。下足箱のあれ不気味だったわ。朝になかった傘が帰るときには突然あるのよ。誰の仕業なのかわからなかった。お母さんなんだって知ってもっと不気味だったわ。子どもが濡れて帰ることのないように、自分も靴とかズボンの裾を濡らしながら小さい黄色い傘を手に持って雨の中やってくるんでしょう。一緒に帰ればいいのにしないのね。そんなに子どもが真ん中にいるならずっと真ん中にいればいいのにあたしわからなかった。でもわかったの。玄関に乾いたタオルを用意して牛乳だってあっためて湯舟だって張ってるかもしれないぬかりなく整えているのお母さん。それがお母さんだもの。お母さんって大人なのよ。当然だってあんた言うけど、それはあんたのお母さんが大人だったにすぎないのよ過信してんじゃないわよ。置き傘。あんた置き傘顔ね。使った傘はもちろん干すんでしょ。折り畳み傘だってそつなく畳めそうなあんたってそういう顔よ。あたしのところはないわよ。置き傘なんてないに決まってるじゃない。それでも廊下を歩きながらもしかしたらって、もしかしたらお母さんがお母さんじゃなくても誰か今日あたしは傘持ってないって知ってる誰かがあたしの下駄箱にも傘吊り下げてくれたりしてないかって、念のため傘立てを見るけどあるはずなかったわ。

それであの子があたしに言うの。傘ないのって。見りゃわかるでしょうないから昇降口で立ってるの。あの子だって持ってるはずなかったのに、同じ団地の子があの子に一緒に帰ろ傘あるからって赤いりんごがたくさん描かれた傘広げるから、あたしあの子の目を見ずにすんだのよ。

まだあの団地にあたしいるからあの子はとっくにいないけど聞こえてくるの。あんたあの子に面倒だねって言った。言ったのよ実際。言ってないってあんた言うけどあんたの眉毛に面倒だねって書いてあったのはっきり。

たまたまあの子とまた会ったとき夏で雨で、傘もささずに濡れたあの子の体から湯気がでてたわ。漫画みたいだけどそんなのじゃなくて人の体って熱があるのそれだけのことなのにスカートが出血してるみたいに裾から色が変わって獣の皮みたいにずっしりしてて、顔に流れる水を何度も払うから泣いてるんじゃないかと思ったけどあの子は眼をぎらぎらさせて雨粒を見て言ったのよ。

この靴防水じゃないからね
すぐ染みてはじめは靴のなかで指がぎゅって縮こまるんだけどね
だんだん開いてくるの指がね自分の指なんだけど勝手に開いてくるの
いいよ濡れてもいいよって開くでしょう
じっとしていると雨でも蚊がやってくるから走るのよ
そのころには靴下だって絞れるほどでそしたらもっと走れるの
私コンクリートの上を走りながら水の上も走ってる走りながら地面を見てる
雨のコンクリートって街灯の光で花火になるの知ってた
花火の破片が靴の下で前から後ろに流れていくの
打ち上げ花火の音もするでしょうコンクリートからよ
聞いてぜんぶ聞いて
どこかの雷と風鈴が合図になって雨戸とシャッターが最短時間で閉められて
トタン屋根は戦争みたいな音がして
粒は地面で無数の王冠になり
足元の雨樋から雨が吐き出され道脇の排水口まで小さな川
木の下を通ると雨音はくぐもって
それまでもあとも花火はずっとしだれて鳴って
隅田川まで行かなくたってそこらじゅう花火の川
車は歩道に噴水し
もっと走って肩には髪を伝った雨が時差をはらんで耳元で大きく落ちる
顔の写りそうになった水溜まりを踏んで割って跳ねて
帰り道の子どもらがわーきゃー言って脇を通り過ぎていくから私
傘を持って届けに行くんだったって思い出してももう夜だから遅かった
間に合えばよかった息も上がり息はぜんぶ私の息子たち
面倒だねぜんぶ聞いてうるさい

あの子に渡してあんたの置き傘折り畳み傘。

山羊昇（やぎのぼる）
喫茶店、精神科デイケア、美術モデルなどをしながらのフリーター。
フィクションを書く。写真を撮る。京都府在住。
２０２０年から【山羊昇の野放しラジオ】を始め、月に一度のペースで公開中。
https://www.youtube.com/channel/UCeyXkX3lFrA5wHz2oocgcCg